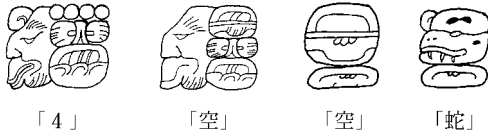


図8 文字の分類5(仮借)



の2つにあたる例をあげることができよう(図8)。

文字の交替(書き換え)には、音の一致または類似による交替のほか、幾何体(geometric forms)と頭字体(head forms)の交替、表語(表意)文字と表音文字の交替がある。

音の一致または類似による交替は、たとえば、「4」と「空」と「蛇」の交替例である。いずれも、カン(kan)と読まれることからくる交替である。これは仮借にあたる。

マヤ文字の多くは、自由に交替する2種類の変体をもつ。すなわち、幾何的な形をした文字と、人間、神、動物などの頭を文字にした頭字体である。さらに、神や動物などの全身を表現した全身字体(full-figure forms)とでもいう、複雑きわまりない文字も存在する。この3つの交替形をすべてもっているものは、マヤ文字の全体では、暦の文字のほかは、ごく少数であるが、幾何体と頭字体は、たくさん文字がもっている。幾何体と頭字体の関係は、幾何体の輪郭を頭字体に変えたもの(図9a)、幾何体の弁別要素を頭字体もつもの(図9b)、幾何体と頭字体の関係が現在のところよく分からないもの(図9c)、の3つがある。

表語(表意)文字と表音文字の交替は、言い換えれば、漢字を仮名書きにするような交替である。仮名と同じように、マヤ文字には音節文字がある。音節文字で語を表わす場合、マヤ語は閉音節言語であるので、ちょうど英語を仮名書きするように、最後の音節の母音は読まないことになる。子音と母音をCとVで表わすと、音節文字はCVとなるが、マヤの代表的な語構成であるCVCは、CV2つで表わされ、CV+CV=CVCとなる。この際、後の母音は前の音節の母音に一致することが多い。たとえば、kuch「荷」はク(ku)とチュ(chu)で表わされ、kab「大地」はカ(ka)とバ(ba)という音節文字で書き換えられる。これを「クノロゾフの母音一致の法則(Knorozov's synharmony principle)」というが、mut「^{しるし}印」のようにmuとtiで書かれ、前の音節の母音と後の音節の母音が一致しない(disharmony)場合も珍しくない(図10)。

この母音不一致の場合、前の母音(すなわち語根の母音)が長母音(V:),または、声門閉鎖音(V?)やh(Vh)がつく複母音を表わすために、違う母音をもつ音節文字が使われるという説が最近出された。すなわち、

図9 交替形

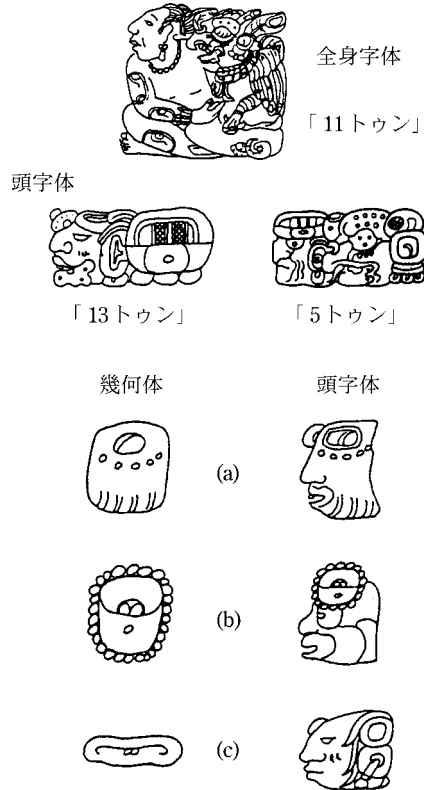
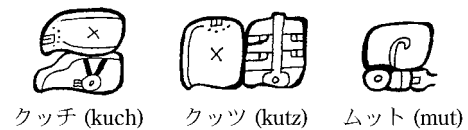


図10 音節文字



$CV_1C = CV_1 + CV_2$ という図式になる場合、表わされる語は CV: C または $CV^?C$, $CVhC$ であるという母音不一致論(disharmony theory)である(Houston, Stuart & Robertson, 1998)。

たとえば、mu-ti は mut を表わす。提出された44例のうち43例までが、この理論に合う。もしこの理論が正しければ、マヤ人は大変な言語学者であったといわねばならない。しかし、例のうち、文字の読みが確かなものは少なく、また、母音が一致する場合は語根は単母音のはずであるが、47例中、語根が単母音のものは30例、残り17例は根母音が複母音であり、母音不一致理論を受け入れるには、まだ検討の余地がある。

表語文字が表音文字と交替する場合の1つとして、表語文字と表音文字が並列される場合を含めておきたい。これは漢字に振り仮名をつけた場合にあたる。図